宮本輝

地の星

流転の海 第二部

新潮社

宮本輝

地の星

流転の海第三部

新潮社

地の星　流転の海　第二部

一九九二年一一月二五日発行

著　者　宮本　輝

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号一六二

電話（営業部）03―三二六六―五一一一

（編集部）03―三二六六―五四一一

振替　東京四―八〇八

印刷所　二光印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

© Teru Miyamoto 1992,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-332508-9　C0093

地の星

流転の海 第二部

装画　榎俊幸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章

木炭バスの運転手は、松坂熊吾が一本松の停留所で降りる際、来週、このバスは廃車となり、中古のディーゼルバスが城辺町と一本松村のあいだを走るようになるのだと嬉しそうに言った。

「この風呂釜みたいなバスには苦労させられましたなァし。戦争中からずっとよう頑張ってくれちょりましたけんど……」

制帽を深々とかぶった運転手は、熊吾が何の反応も示さないことに怪訝な面持ちを浮かべたが、運転席の窓から二匹の紋白蝶が車内に入って来たのに気を移し、

「朝鮮の動乱は、どがいな具合ですかのお?」

と、さして興味のなさそうな口調で訊いた。

「わしは八卦見やありゃせん。よその国の戦争のことなんかわからんわい」

松坂熊吾は、ぶっきらぼうに言って、四歳になったばかりの伸仁を抱きあげ、木炭バスから降りた。彼は、バスに酔い、血の気を失って、もういまにも嘔吐しそうな伸仁に腹をたてていたのだった。

吐くな。車の中でゲエするようなやつは、わしの子やあらせん。もし吐いたら、縛りあげて、家の前の梨の大木に三日ほど吊るすぞ。父にそう脅され、伸仁は目をつむって涙を流し、熊吾の腕に顔の片方を強く押しつけていたが、気分が悪くなってから七、八分で一本松に着いたので、

なんとか吐かずにすんだ。
熊吾は、伸仁を地面に降ろし、虫捕り網を持たせると、広見への県道へとつづく小さな商店街を歩いた。村に一軒しかない劇場は、〈市松劇場〉という屋号で、そこでは、旅廻りの一座が芝居をやったり、東京や大阪から浪曲師がやって来て興行したり、映写技士がフィルムを持って訪れ、都会では一年も二年も前に封切られた映画が上映されるのだった。
その市松劇場の前で立ち停まり、熊吾は、虫捕り網を振り廻しながら、大きいゴム草履を履いて、父のあとをついてくる伸仁に話しかけた。
「まだゲエしそうか?」
「もう、なんちゃない」
「乗り物に酔うっちゅうのは、おなごだけや。男が、ちょっとバスに揺られたからっちゅうて、ゲエしそうやなんて情けないぞ」
「うん、もう、なんちゃない」
「よし、亀おじいちゃんの墓はもうすぐそこじゃけん、弱虫言わんと、しっかり歩けや」
行きかけると、県道のほうから、いかにもいなかやくざといった風態の男たちが歩いて来た。そのうちのひとりは足が悪く、太い杖をついて、左足をひきずっていた。熊吾は、その杖が仕込み杖であることに気づき、こんな四国の西南端の、農業と林業以外に生きる糧(かて)などない愛媛県南宇和郡一本松村にも、やくざが横行しはじめたのだろうかと思った。
すれちがって五、六歩行ったとき、
「闇成金の松坂の熊は、一本松に足が向けられんけん、妹に買(こ)うてやった城辺の家に住んじょるっち聞いたがのう」

という声がした。
熊吾は、春の光の中で、振り返って、男たちを見た。声の主は、仕込み杖をついた足の悪い男で、ほぼ自分と同年齢の五十四、五歳に見えた。しかし、熊吾は、その男に見覚えはなかった。
「腐るほどの金を持って神戸から帰って、でかいリンゴ箱にぎっしり金を詰めて役場に寄付したっちゅうが、そげなことじゃお前の罪障は消えんぞ」
「あんたは誰じゃ？　わしのことをよう知っちょりなさるようやが……」
熊吾は用心して、伸仁を自分の膝のところに招き寄せてから、そう訊いた。熊吾より幾分背の低い、しかし猪首で、肩も胸も筋肉で盛りあがっているその男は、声を出さずに笑うと、指先で目やにを取りながら、浅黒い、肉厚の顔を熊吾に向かって突き出した。
「伊佐男よ。増田の伊佐男じゃ。おおかた四十年前に、お前にこの左足をこわされた増田の伊佐男よ」
「増田の伊佐男……」
そういえば、そんな少年がいたような気がする……。熊吾は、増田伊佐男という男の顔と左足を交互に見やりながら、記憶を探った。四十年前といえば、自分が十四、五歳のときではないか。そのころ、わしがこの男の足に大怪我をさせたというのか……。
「子供のころはようケンカをしましたが、足をこわすほどの大怪我をさせたっちゅうようなことは覚えとりませんなァし」
熊吾はそう言いながらも、増田伊佐男の、いかにも品性の下劣そうな脂ぎった顔と、ぶあつい瞼の下で光る細い目から視線を外さなかった。
「忘れたっちゅうわい」

連れの二人の男に、あきれたように言ってから、増田伊佐男は、熊吾に一歩近づいた。熊吾は伸仁を自分のうしろに廻らせながら、一歩退いた。
「そんなぶっそうな杖を持って、このいなかで昼日中に何をやらかそうっちゅうんかのお。とにかく、わしはあんたを知らん」
「お前が忘れっしもても、やられたほうのわしは忘れちょらんのじゃ」
南風が吹くたびに土埃(つちぼこり)をあげる日盛りの道に、増田伊佐男は仕込み杖を投げ捨て、
「いかにもこれは仕込み杖よ。これで、いまここに土俵とおんなじ大きさの丸を描いてみい。ほんでもって、わしと三番勝負の相撲を取ったら、ひょっとしたら松坂熊吾は、上大道(わうどう)のててなし子の伊佐男を思い出してくれるかもしれんぞなァし」
と歪んだ笑みを消さないまま言った。
上大道のててなし子……。熊吾はその言葉を耳にしたとたん、増田伊佐男の四十年前の容姿を思い出した。当時、増田伊佐男は骨と皮だけみたいに痩せていたが、馬鹿力があるうえにすばしっこくて、近在の村々の干柿や、編んだばかりの藁草履(わらぞうり)を盗む、手癖の悪い少年だった。
ある日、家から近い日枝神社の境内で熊吾が遊んでいると、伊佐男が、神主の住まいのほうから走り出て来たのだった。熊吾も、熊吾の友だちも、伊佐男が何か盗みを働いて、逃げようとしているのだと思った。
「わうどうの伊佐男じゃあ、あやつ、餅を持っちょるぞ！」
と誰かが叫んだ。熊吾たちに取り囲まれ、逃げ場を失った伊佐男は、はだけた着物の胸元から餅をつかみ出すと、それを熊吾めがけて投げつけ、
「三番勝負じゃあ。熊に負けたら、わしをひっつかまえて、好きにしてみい」

と言った。そこで、境内の隅に、木の棒で円を描き、熊吾と伊佐男は相撲を取った。一番目は伊佐男が勝った。二番目、押しまくってくる伊佐男をいなし、熊吾がその背を突いたとき、勢いあまって、伊佐男は土俵から飛び出し、さらに三尺ほど下の、平らな空地に落ちた。

「さあ、もう一番やぞ」

と熊吾は伊佐男に言ったが、伊佐男は膝を打ったのか、しばらく起きあがれなかった。

「戦意喪失。熊の不戦勝じゃ」

と誰かが言った。伊佐男は、足をひきずり、神社の石段を降りて行き、二、三度、うずくまってから、田圃に囲まれた上大道へのいなか道を逃げて行った。

上大道は、熊吾の家がある広見から半里ほど西にある集落で、正しくは〈うわおおどう〉と読むのだが、昔から人々は〈わうどう〉と呼んでいた。〈上大道のてなし子・増田伊佐男〉は、その後しばらくして母を亡くし、宇和島の遠縁の家に貰われて行き、以来一度も熊吾とは逢うことがなかった。

「相撲を取ったな……。広見の日枝神社の境内で」

と熊吾は、市松劇場の映写室の小窓に目をやって言った。それから、自分のうしろで虫捕り網を振り廻している伸仁を無意識に抱きあげた。

「わしは、あの怪我で二回死にかけたんじゃ。膝の骨が、一寸ほど縦に割れとったんやが、医者に行く金なんかありゃせなんだ。お袋が死んで、縁の薄い親戚に貰われてから、その縦に割れた骨が腐りだしたんじゃ。松山の病院で手術をして、なんとか命拾いをしたが、十八のときにまた骨が腐りだした」

増田伊佐男は、左足の膝を掌で叩き、

「二回の手術で、骨を二寸も削ってこのざまでなァし。兵隊になってお国の役に立ちたいと思うちょったが、兵隊になるどころか、百姓仕事もでけん体になっしもた。わしは松坂熊吾を恨んだものよ。去年、神戸に行って、やっとこさお前の居所をみつけたら、なんと一本松に帰ったっちゅう。じゃけんど、やっと見つけたぞ」

「わしは、あんたがそんな大怪我をしたとは、夢にも思うちょらんかった」

熊吾はそれだけ言うのが精一杯であった。何やら茫然となってしまって、言葉を喪っていた。

「思いだしてくれたか。もうわしが土俵を割って勝負はついちょるのに、力まかせに背中を突いて、わざと境内から三尺下の石の上に落としくさったことを、松坂熊吾さんはやっぱり忘れちょらんかったのお」

「わしが、わざとあんたに怪我をさせたと思うちょるのか?」

このような男に何を言っても無駄だと思いつつも、熊吾はそう訊いた。増田伊佐男は、連れの男に、道に投げ捨ててある仕込み杖を拾うよう命じ、その杖に全身を凭せかけるみたいにして、傾いて立つと、伸仁に向かって言った。

「坊は、松坂熊吾さんが四人目の奥方にやっと産んでもろうた宝物やそうじゃのお。この伊予のいなかで、ろくに食う物もないご時勢に、本物のバターを白いご飯にかけてお食べになっちょるお坊っちゃまよなァし。二人目の奥方も、三人目の奥方も、子がでけんもんじゃから、この松坂熊吾さんは無慈悲に捨てっしもた……。坊の親父さんを恨んどる人間は、この世にぎょうさんおんなはるみたいじゃ」

そして、増田伊佐男は、伸仁の頬を指でさわろうとした。熊吾は、その指から伸仁を遠ざけた。増田伊佐男は、行き場を失くした指で再び目やにを取り、不快な笑みを熊吾に向けたあと、踵を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

返して、市松劇場の中に入って行った。
熊吾は伸仁を地面に降ろし、
「さあ、亀おじいちゃんの墓参りに行くぞ」
と言って、その尻を軽く叩き、県道に出た。牛車が車輪を軋ませて、でこぼこな道に土煙をあげながら行き過ぎた。
目前に広大な田園がひらけ、その周りを低い山が、丸い大きな輪のように巡っていた。熊吾は、若いころ、自分の生家の門前に立って、まるでここは巨大な土俵のようだとしばしば感じたものであった。
おととしの昭和二十四年に、神戸の御影の屋敷を人に預け、松坂商会をひとまず閉めて、この郷里に体の弱い妻と子を連れて帰って来たとき、彼はまっ先に生家のあった場所に立ったが、そのときも、〈大きな土俵〉のど真ん中にいるという感慨は変わらなかった。杉や檜の植林山は、土俵の俵であり、農家がちらほらと建つ田圃は、力士の代わりに、百姓と牛馬がのんびりと土を耕す土俵であった。
桜が散り、田圃一面にれんげの花が咲いて紅一色に染まり、紋白蝶やアゲハ蝶が、熊吾と伸仁の頭上にあった。
「蝶々が死なんように、上手に獲っちゃらにゃいかんぞ。捕えたら、あとで逃がしてやるんじゃ。お前も、捕えられて籠に入れられるのはいやじゃろう。遊んだあとは、母さんのところに帰りたいじゃろ。蝶々もおんなじじゃ。蝶々も、すぐに母さんのところに帰してもらえるとわかっとったら、お前の網の中に入ってくれよる」
れんげ畑を走り廻り、蝶を追ってむやみやたらに虫捕り網を振り廻している伸仁にそう言い、

熊吾は、名路の集落へと長く伸びる道を歩いた。
橋を渡ると、右手の山すそに法眼寺の山門が見え、そこから何ほども離れていないところに日枝神社の石の鳥居が見えた。熊吾は、父に言われたとおり、網を頭上に立てて、蝶がそこに入ってくれるのを待っている伸仁を見て笑った。だが、笑いながら、さっきの増田伊佐男の、単なるいいがかりとは思えない話に心を傾けた。
四十年前、十四歳のときに、あいつはわしと相撲を取り、誤って三尺下の空地に落ちた。それは嘘ではない。この自分にも記憶がある。しかし、そのとき膝の骨を縦に一寸ほど折り、それが因で現在の体になったというのは本当なのであろうか。そのために体を使う仕事にはつけず、徴兵検査にも不合格となり、この松坂熊吾を恨みつづけてきたというのか……。
熊吾は、増田伊佐男が、自分たち家族のことについて詳しく知っていたことも不気味に感じた。それで、熊吾は墓参りをあとに延ばし、名路集落に住む長老の家を訪ねてみようと思った。ことし、八十六歳になる長八じいさんは、いまでも朝湯朝酒が好きで、頭もしっかりしている。長八じいさんなら、〈上大道のててなし子・伊佐男〉について知っているかもしれない。
「蝶々は、網の中に、なんちゃ入ってくれん」
額に汗をにじませて伸仁が言った。
「蝶々を安心させてやらにゃあいけん。なんちゃ悪さをせんけん、どうぞぼくの網に入っちゃんなはいと頼んでみィ」
教えられた言葉を、伸仁は、飛び交う蝶たちに言いながら、れんげ畑を右に歩き左に歩きして、父に遅れまいと歩を運んだ。
熊吾の生家が見えてきた。そこには、いまは松坂家とは縁もゆかりもない人が住んでいる。

父・亀造が死んだあと、大阪で事業をおこすための資金に窮して、熊吾が売り払ったのだった。けれども、ただ金欲しさに、母や妹たちの反対を無視して売ったのではなかった。夫を亡くした熊吾の母・ヒサが、五十を過ぎて再婚すると言いだし、熊吾が大阪に出ているあいだに、十年近く隣村でやもめ暮らしをしてきた男を家に引き入れたのである。

熊吾は激昂し、父が遺した家にそんな男を入れるわけにはいかないと怒鳴り、母の、無口で気弱な再婚相手を縁側から中庭に放り投げた。その男は五年後に死んだが、ヒサに言わせると、

「熊が殺した。縁側から放り投げられて、頭を打って以来、ひどい頭痛持ちになんなはった。死ぬときも、頭が痛いっちゅうて、のたうって事切れなはった」

とのことだった。ヒサはヒサで熊吾を許していなかったが、熊吾もまた自分の母を軽蔑しつづけてきた。自分の母は、夫が死んで三回忌も済まないうちに、五十三にもなって男を欲しがった。食うに困ったわけでもないのに後家を通せなかった汚ならしい女だ……。

その母への思いは、いまだに熊吾の中でくすぶっていたが、同時にそれが松坂熊吾という男の深い部分における病理を成していることを、熊吾は気づいていなかった。

「これが、父さんの生まれた家じゃ。亀おじいちゃんもこの家で生まれた。門の近くに大きな井戸があるじゃろ。このあたりで、門のところに井戸があるのは、みんな名家じゃ。お遍路さんが通ったり、野良仕事で疲れて立ち寄った人に、冷たい井戸水を施せるっちゅうのは、そこいらの水呑み百姓とは違うっちゅう証しなんじゃ」

父から随分遅れたが、泣きごとを言わず歩きとおした伸仁に、いまは他人の家となった生家を覗き見せて、熊吾は言った。

「柿の木も、栗の木も、みんな太いじゃろうが。父さんは子供のころ、あの柿の木にのぼって、

実をほじくりにくる烏をやっつけたぞ」
虫捕り網に蝶が入ってくれないので、そのうち、れんげを摘み始め、それに飽きると、小川の底を掘ってしじみを獲り、またそれに飽きると畦の土くれをこねたりして、伸仁は県道からの、おとなの足で二十分かかる行程を、一時間もかかってついて来たのだった。
熊吾は、伸仁の毛糸のチョッキを脱がせ、抱きあげてゴム草履も脱がせると、それらを自分のズボンのポケットに突っ込み、石垣に沿って生家の角を左に折れた。
そこからまたれんげの密生する田圃がつづいた。増田伊佐男という男から発散していた不快な磁力とでも表現するしかないものは、松坂熊吾がかつていささかでも触れ合ってきた人間にはない、独特の不気味さと粘着力を持っていたので、熊吾はなんとなく厄介な問題が自分の周辺に起こりそうな気がして、歩調を速めた。
集落のはずれに、長八じいさんの藁ぶきの家があった。長男に先立たれ、その長男の嫁と三人の孫に大事にされて暮らしている。孫は四人いたが、末の孫は昭和十八年に徴兵され、南方の島に行ったきり消息が絶え、いまだ生死不明のまま帰還していなかった。そのような男たちは、一本松村にも、城辺町にも十名近くいたのである。
牛小屋の前から中庭のほうに廻り、母屋の縁側から声をかけると、頭に一本の毛もない長八じいさんが出て来て、
「なんと、熊吾がちっちゃな息子とおいでんなった」
と言い、伸仁の頭を撫でた。熊吾は、亀造の墓参に来たことを述べ、伸仁を縁側に坐らせた。そして、〈上大道のててなし子・増田伊佐男〉について知っていることがあれば教えてほしいと言った。

長八じいさんは、血色のいい顔から笑いを消し、煙草盆を持って来て、縁側に坐り、薄暗い母屋に声をかけて、嫁に水を持ってくるよう言った。
「戦争が終わってすぐのころに、伊佐男はわしんとこへ来て、松坂の熊吾のことを根掘り葉掘り訊きよった。人相の悪いごろつきを四人ほど引き連れちょった。なんで熊吾のことを知りたいのかっちゅうてわしが訊くと、十四歳のときの礼がしたいっちゅう。それ以上のことは言いよらん」
長八じいさんは、自家製の煙草をきせるに詰め、
「子供の時分から性根の悪いやつじゃったが、母親が生きちょるあいだはまだましじゃった。もらわれて行った先が宇和島の山師で、えらいいじめられたっちゅう話やが、人の噂では、その山師は女房もろとも伊佐男に焼き殺されたっちゅうわい」
「焼き殺された？」
と熊吾は訊き返した。
「夜中に台所から火が出たんやが、火の廻りが早ようて、あっちゅうまに、家の者は火に包まれたそうじゃ。伊佐男だけが難を逃がれたっちゅうが、膝の骨の病気で、二回も手術して、そんなにすばしっこうに動ける体やあらせんもんで、随分警察に調べられたっちゅうわい。そのあと、島根とか山口を転々としたらしいんじゃが、戦争が終わると、広島で〈増田組〉っちゅう看板をあげて、人様に言えんような商売で縄張りを拡げたっちゅうわい」
熊吾は、ついさきほど、一本松の市松劇場の前で増田伊佐男に呼び停められたこと。足の怪我は、どうやらこの自分に責任があるらしいことを長八じいさんに話して聞かせた。
「そりゃあ用心したほうがええ。あいつは人間の格好をした蛭やっちゅう者が何人かおるけん」

と長八じいさんは言い、大阪で成功したのに、なぜ郷里へ引きこもったのかと熊吾に訊いた。熊吾は、正直にその理由を述べ、水を汲んで来たリキに笑顔を向けた。

「まあ、お母さんにそっくりやねェ」

よほど喉が乾いていたらしく、リキに差し出された水をひったくるようにして飲み始めた伸仁の頭を叩き、

「こら、ちゃんとお礼を言うてから飲まんか」

と熊吾は叱った。そして、三十歳で後家となり、その後実家に戻らず、婚家で舅や姑につかえ、四人の子を育ててきたリキの、日に灼けた皺深い顔を見て、

「おリキちゃんは、わしの家内を知っちょるのか？」

と訊いた。

「松坂の熊兄さんの奥方は、飛んじょる蠅を手で捕まえるどころか、僧都川の鮎まで手でつかんでみせるすばしっこい御令室やって、城辺の姉さんに聞いて、こないだ石塀越しに見てきたでなァし」

リキはそう言って声をあげて笑った。そんなことは初耳であった。房江が、僧都川の鮎を手でつかむ？　そんなアホな……。城辺町の北裡で、姑や、夫の妹とその二人の子供たちと暮らし始めて二年近くが過ぎ、口には出さないけれども、御影の時代にはまるで無縁だった嫁姑の問題に悩んでいるらしい房江の、いっそう精気の萎えたような容姿からは想像もつかない話に、熊吾は笑い返した。

「僧都川の鮎が手でつかめるかや。飛んじょる蠅を手で捕まえる？　わしの家内がか？」

「見た人が何人もおんなはるけん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com